

# 常なる磐

つねなる いわ seasonⅢ

令和 4年 5月 13日(金)

その1 通算 225号

## ◇ 再生力③

4月半ばからぽかぽか陽気が続き、校内の樹木の生長をぐんぐんと後押しする。中でも目を見張るのが、【R4.4.23発行・再生力②】でも紹介したアベリアだ。



刈り込みにより、冬季は立ち枯れしたかのように見えた校舎東側の「アベリア」が芽吹き始めたのが4月上旬。それから1か月後で右写真のような状態である。

強再生力による大変身である。書物によれば、約2年で全回復レベルまで生長するらしいが、再生にかかる期間も短縮されるのではと思えるほどの勢いだ。

当然のようにアベリア周辺の雑草も生長する。アベリアを超える猛烈な勢い。けれども、写真で雑草の存在が目立たない。これは、加藤校務主任と山田校務員のこまめな世話によるもの。目立たないがアベリアの成長を妨げる妨害因子の除去が成長を促進させている。

そして、ここからは緑化美化委員の活躍へと変化していく。児童へのバトンパスだ。



これこそ、  
受け継がれ  
引き継がれ  
てゆく

【本物の再生】  
の出発点。



さて、植物再生の鍵となるもう一つの「負の因子除去」に視点をあててみよう。



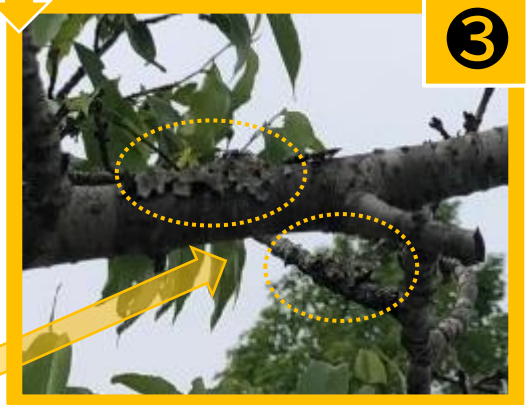
葉桜になった校庭の<sup>しょうかわざくら</sup>莊川桜であるが、生い茂る葉の衣をふんだんに纏った①の様は、<sup>せいき</sup>生気に満ちている。

その中で、よく見ると**赤枠**内の枝が白く見えるのが確認できるだろう。

②と③が近影だ。特に③、樹皮に付着する「かさぶた状」のコケ。これが「ウメノキゴケ」。

除去しきれずに残ったものか、再繁殖したのかは不明だが、処置以前は幹の樹皮どころか枝先までびっしりとこびりついていてた。

及ぼす影響は②の枝先で確認することができる。<sup>こずえ</sup>梢に膨らみは見えるものの開花までには至らない。それどころか葉さえ存在がない。部分<sup>えし</sup>壊死と思われるが、以前は至る所で見られたこうした状況も随分と改善され再生へ。①の姿となった。



そして、<sup>たたず</sup>莊川桜の隣で堂々たる姿で佇むクロマツ。松葉の色に深みを増し、これまた生気を取り戻した。処置後の元気な姿で初めて分かる処置の必要性といったところ。

病気には強いとされるクロマツだが、やはり「ウメノキゴケ」の被害を受けていた。

去年との大きな違いは「ミドリ」とよばれる「生長点」の数と勢い。まるで成長期の子供のように「すくすく」。秋には、松ぼっくりゴロゴロ。手にする子供の笑顔を導く。

